

## 安倍政権による戦後日本国家レジームの解体と私たちの側からの「対抗線」

武藤一羊

### I 安倍レジーム・チェンジ

◆継承原理の公然化、国内的貫徹；1995年以来の過程の全面化（2007年の原理的挫折；それゆえ目隠しで突っ走る一中、韓、北朝鮮関係に目をつぶる；

◆政治モットー「とりもどす」—何を何から？（A）帝国の「栄光」を「自虐史観」（「太平洋戦争史観」・マルクス主義史観）から（歴史認識）；（B）主権を人民から、人権を「天賦人権説」から（改憲）、（C）平和主義の弱い日本から戦争しうる強い日本を（国防軍・集团的自衛権）（D）停滞から経済成長を（TPP、労働規制撤廃；ここだけは戦後高度成長が理想化）など；

◆戦後国家の原理矛盾的性格の展開として；継承性原理が特殊右翼潮流の主張ではなく戦後国家の一原理だった証左（一般にはそう認識されていない；ネオリベの影論など；戦後国家成立の過程に内在）；95年以来の「歴史認識」右翼攻勢—自民党掌握；「村山談話」v s 自虐史観攻撃—このなかで平和主義原理の敗北—組織的母体の解体、原理自身の拡散・解体； $3 - 1 = 2$ ；米国原理と継承原理が裸で向き合う（3原理の矛盾的共存を可能にする要素としての平和主義の沈下）継承原理の政策的戦略的貫徹は、米国原理と米国の覇権支配を当てにして初めて成立；この矛盾の顕在化、米国の警戒を呼び起こしつつなお継承原理を突っ張らねば根拠を失うという安倍政権の原理的矛盾；その過程的解決形態としての現実の安倍政治；

◆この形態とは何か。

（1）継承原理への固執は中国・韓国・北朝鮮との関係（一般にアジアとの関係）の基礎を破壊するので、安倍日本は隣国との友好関係を前提に立国できない、「首脳会談」で継承原理を事実上承認させたいのが安倍の思惑だが、承認させるのは不可能；（帝国を美化・合理化する継承原理はアジア隣国への蔑視、差別、羨視、偏見を法則的、系統的に再生産—在特会と安倍政権は連続体）；

（2）そこで、中国を仮想敵とする中国包囲陣形の構築＝地球儀戦略＝「自由と繁栄の弧」＝「ドーナツ戦略」の採用（本気度—安倍の異常に頻繁な外遊）；重点的獲得目標—ベトナム、フィリピン、ASEAN、モンゴル；原発再稼働・新設、それを前提の原発輸出はこの戦略のカナメの要素、（2）勃興する中国と沈下する米国の米中関係のなかで、この中国包囲戦略を米国の「アジア回帰」戦略に重ね合わせることをもくろみつつ「価値観戦略」として展開；

（3）米国の対中国ASBCの下で米国の多国籍軍事へのいっそうの一体化の推進（陸自海兵隊化、沖縄への強硬策、南西諸島基地化、集团的自衛権、米国軍事予算への「援助」etc.）

；継承原理を米国に許容させる代償；それを通じて継承原理実体化の攻撃的軍事力の構築、獲得（積極的平和主義）；

（４）これらを実現する主体としてグローバルな金融資本・超国家企業と結び付いた日本出自の大企業＝財界に置く、「世界で一番企業が活動しやすい国」；「日本国民」は主体ではなく、企業活動の客体）；

（５）沖縄―自決権レベルの日本国家との対質を日本国島嶼防衛（対中軍事対決の最前線）の文脈に引きずり込み（沖縄の世論・運動の分裂を画策しつつ）、同時に米国への一層の忠誠披瀝の証として辺野古基地計画を強行するだろう；ここに賭けられているのは米日沖の三角構造と日本国家の成り立ちそのもの；

◆グローバル政治では安倍戦略は白昼夢；（１）米中関係―「複合覇権」（武藤）―「封じ込め」ではないし、ありえない；安倍日本の暴走―尖閣で勝手に軍事衝突―への危惧；

（２）日米関係―継承性原理とその歴史評価は最初から米国原理と相いれない（靖国、慰安婦、大東亜戦争）；「価値観」の一致にならない；（３）日本主導の中国包囲網にはだれもついてこない；ベトナム、ASEAN、インド、ロシア；強大な中国の経済的、政治的、軍事的脅威を感じることに、日本の唱える包囲網に参加とは別；巨大な経済的存在としての中国、活発な中国外交；「繁栄と安定の弧」―客観的根拠を欠く；鳩山「幼稚な中国包囲外交」；

◆尖閣が日中関係を悪化させたというより、中国包囲戦略のためにむしろ尖閣が利用されている；領土問題の存在（これは否定しようのない事実）を認め交渉によって解決点をさぐる―ベトナム、ASEAN など一道をとれば、中国を仮想敵とする戦略は具体的手がかりを失う；

◆今日の世界で通用の根拠を欠く継承原理によるレジーム・チェンジを強行するためには、日本を外界から、世界民衆の獲得物である普遍的原理から、イデオロギー的に遮断し日本国家内部だけで自閉する状況を作る必要―「国民」をそう誘導するだけでなく、政権自身がそう考え始める；311以後の「がんばれ日本！」、特にマスコミ、「日本のよさ」、「日本ならでは」が繰り返しいたるところに挿入される；日本という尺度で日本を計る；自己都合で世界状況を読み替え、それにもとづく「挙国一致」（c.f. 1930年代）の多数派形成による強制、そこで生じる虚構を現実として政策展開；虚構と現実の拡大する乖離、虚構を願望に基づいて現実と読み替え；その最大規模の装置としての東京オリンピック；

◆東京オリンピックがこの挙国一致形成の基礎となる装置；（A）装置をつくる：「汚染は完全にコントロール」の平然たる嘘―仮想現実―をもとに誘致；仮想現実を現実として計画、政策、投資実行；仮想現実がフクシマの現実を侵略し、乗っ取り、被災者、労働者を踏みつけにする；観客の目の前で巨象を消すマジック、しかしマジシャン自身も象は消えたと信じ始め、そのように振る舞い始める；（B）その装置で―見非政治的で無害に見える挙国一致をつくりだす；スポーツ愛国心・「がんばれニッポン」のアベ印挙国一致の櫓に、改憲・軍事化・東京「特区」その他レジーム・チェンジの中身を載せて走ることができる；東京改造の巨大投資、関連するインフラ投資、治安警察体制の強化、などなど、

オリンピックの櫓に乗れば一瀉千里；(C) オリンピック日程をそのまま政治日程（改憲・レジームチェンジ日程）に転化・転用する；オリンピックまであと何か月とゴールを設定できる—7年は長期政権の単位—政治的破綻をオリンピック秒読みで回避する

## II 対抗線へのプロセス

◆行動—原発—被害の深刻さ、広汎性、危険性、権力の無責任性・抑圧性—運動の草の根での多様な広がり、TPPなど他分野でも行動・運動は拡大；SNS などコミュニケーション；しかし個別テーマの運動は、個別の力量でも、連合の形でも、安倍国家改造権力全体との対峙線を形成していない；唯一、沖縄では、自決権をベースに拒否力が働いている；

90年代からの右翼言説の圧倒的主流化、社会変革言説の陳腐化ないしはゲッター化、新しい動きがおのがじしの展望を切り開いていない状況；このなかからいかにして社会的対抗勢力が出現しうるか。

◆安倍国家改造の幻想性に即して、ハードな現実を全面浮上させて仮想現実を消滅させることが基本；系統的な活動の組織；右翼言説がスタンダード化しているなかで、これは個々の事実の暴露だけではなく、言説と言説の闘いになしうるか；世論調査では、フクイチはコントロールされているという安倍を圧倒的多数が信じていない、しかし過半数が安倍を支持；多数者の意識に切り込んで、政治的意見を表明し論争する環境をつくるイニシャチブ；（意見が違えば沈黙か、誹謗中傷か—平和主義原理の沈没の表れ）。

◆課題の連関を運動の連関に媒介する意識的な作業、活動；課題間の現場交流、共同認識の形成、課題間だけでなく運動文化間（いくらか世代間）も；アジア中心に国境を越えた同様の作業；交流、認識共有が、単発に終わらず、抵抗戦線の形成につながっていくためにはどうすればいいか、どのようなリーダーシップが必要か、可能か；

◆安倍は継承原理による家族から国家、対外関係にいたる彼らの目標を掲げている；それにたいして民衆の側は何を共有し、対置するかを言説の闘いのなかで、明らかにして行くことが不可欠；どのような手段で？どのようなプロセスで？

◆その上に議会政治の領域で、安倍路線に対抗する政治勢力をどのように出現させるか、という問題が避けて通れない。オリンピック政治期間は二つの国政選挙を含む；原発、憲法、沖縄、靖国など基本テーマで安倍と行をともにしない議会政治勢力の形成；

◆「処士横議」の開始が決め手。

以上